

実用主義の眞理概念に関するラッセルの批判に就いて

西 川 竹 彦*

Takehiko NISHIKAWA : RUSSELL'S CRITICISM ON
THE PRAGMATIC NOTION OF TRUTH

(1)

周知の如く、実用主義(Pragmatism)の定礎者はペース(C. S. PEIRCE)である。ペースに依つて始めて、実用主義は論理分析(Logical analysis)乃至は眞の定義(true definition)に関する理説として確立された。カントは彼の道徳形而上学に於いて pragmatisch と praktisch とを厳密に区別し、前者を日常的経験の領域に、後者を a priori な思惟の領域に適用しているが、このカントの用語例に従つて、認識と目的、知識と行動の關聯性を承認する自説を、ペースは実用主義と呼んだのである。普通実用主義はアメリカ的な概念として考えられているが、定礎者ペースの説明に依れば、それは上述の如く彼のカント研究の反省から引き出されたものである。

この実用主義がペースからジェームズ(WILLIAM JAMES)に受け継がれ、彼に依つて發展せしめられ、更にデューイ(JOHN DEWEY)によつて整然たる形態と構造を持つ理説として完成されるに至つたものである。しかし、これ等三人の代表的なアメリカの実用主義者を比較して見る時、何れも觀念をその「實際的帰結」(practical consequence)と結び付けて考えるという原理的な態度に於いては同一であつても、その意図する所はペースとジェームズ・デューイとでは、大いに異なる所があるように思われる。ペースの意図する所は経験の領域に於ける「概念の普遍性」(the universality of concepts)の意味を説明するにあつた。恰かも a priori な思惟の領域に於いて、カントが実践理性の法則を打ち建てたように、ペースは日常的経験の領域に於いて「行爲の法則」として「概念の普遍性」を説明しようとしたのである。

従つて、ジェームズが実用主義を特殊なものと結び付けた時、ペースは自分の実用主義をジェームズ等のそれから区別する爲めに、プラグマティズム(pragmaticism)とさえ呼んでいるのである。即ち如何なる目的の下に於いても、又如何なる事情の下にあつても適用し得る「行爲の法則」として「概念の普遍性」を確立しようとしたペースはそれが特殊な目的や個人的目的と結び付けられて、行爲の實際的帰結を尊重する理説に変貌することを明かに拒んでいるのである。だが、今我々が問題にしようとするラッセル(BERTRAND RUSSELL)の実用主義の眞理概念に関する批判は、ペースのいう pragmaticism ではなくして、ジェームズやデューイのいう pragmatism である。

(2)

ラッセルは「20世紀の哲学」(Philosophy in Twentieth Century)と題する彼の論文の中で、現代を代表する有力な哲学的潮流の一つとして実用主義を挙げ、その原理的な点の批判に触れつゝ、次の二つの点を実用主義の認識論上の大きな功績として取り上げている。

その一つの点は、実用主義の説く眞理観が、眞理とは所詮相対的な「人間的眞理」(human truth)に過ぎないものであることを力説している点である。認識論的には兎角の論議はあるとしても、我々の所有している眞理は、我々の生活の営みを度外視しては考え得られない極めて人間的なものである。それは人間的なあらゆるものと同じく「不確実な」(fallible)「不安定な」(changeable)ものであると言つてよい。仮令、眞理を裏付けているものが客観的な事実であるという實在論的立場を取るに

* 哲学研究室

ても、我々人間の生活の圏外に横たわるものに対しては、それを何等かの意味で「事実」(Fact)とは呼び得ても、決してそれを「眞理」(Truth)とは呼び得ないであろう。

確かに人間の認識は意識に於ける問題であるよりは、行動に於ける問題である。認識を意識の問題としてのみ捉えて来たことが、従來の認識論の特徴であつたとすれば、認識と目的、知識と行動との關聯性に於いて、認識の問題を新しく實際的に捉え直したものが、實用主義であるということが出来よう。この点に於いて實用主義の功績は、ラッセルの指摘する如く、大きく評価されねばならぬと思うのである。

次に第三の實用主義の功績として彼の指摘している点は、認識論上所謂「検証」(verification)として知られている「観念」と「實在」との対応關係に關してである。この點に關しても従來の認識論は兎角曖昧であつて、單にこれを物と観念の一致乃至は対応として論じて来ただけであつた。しかし、観念が物と一致するとはどんなことなのであろうか。ジェームズはその著「實用主義」(Pragmatism)に於いて、それは結局観念が約束していることを自ら履行する (fulfil) ことであり、観念が自ら約束通りの帰結へ導いたか否かを、自ら立証する過程であるという。彼等實用主義者に言わしむれば、一致とか対応とかいうことは、従來論理が仮定していた程決して「図式的單純さ」(the schematic simplicity)をもつものではなく、それは極めて漠然としたものである。従つて、種々なるものの複合から成り立つ我々の信念 (belief) が、既往の認識論の主張する程、單純に「唯一つの正確な眞事」(one precise fact)に對應しているとは、最早や彼等には考えられないのである。それは「唯一つの正確な眞事」に對應していない許りでなく、屢々幾つかの領域にさまたがつていると彼等も考へる。従つて一つの信念は、彼等にとつて、物との一致又は不一致に於いて簡單に眞又は偽として規定し得ない許りでなく、却つて眞でも偽でもあり得る如き、謂わば「白と黒との両者に依つて汚れた灰色の種々なる陰影の如きもの」と見做されているのである。

かく物と観念との一致を従來の認識論の如く「図式的單純さ」を以て割り切らない所に、ラッセルの指摘する如く、却つて實用主義の認識論的優越さが認められるのであつて、斯くの如き實用主義的認識論の自己主張が、後に見る如くその理論的根底にヒューム的な懷疑主義を宿し、それが眞理判定の規準を客観的事實に求めしめずして、逆に観念の自証能力としての「有用性」に彼等を赴かしめたとはいへ、従來の認識論の盲点を鋭く衝いた、彼等の自己主張そのものの正しさは、認められねばならぬであろう。

これが實用主義の功績としてラッセルの指摘している第二の点であるが、眞理の相對性を主張し不可知論的懷疑主義の色彩をもつラッセルが、實用主義の認識論的立場を一概に否定するものでないことは、以上の彼の所説に於いて略々明かであろう。しかし、ラッセルの所論が何処までも實用主義のそれと一致するかと言へば、それは否である。寧ろ、ラッセルと實用主義の認識論的主張とは幾多の點に於いて、氷炭相容れぬが如き相貌を呈しているのを我々は感ずるのである。然らば如何なる點に於いて、両者の主張は相異なるのであろうか。以下數項目に亘つて、それを見て行きたいと思うのである。

(3)

一般的に言つて、認識の眞理性をその有用性に求めんとするのが、實用主義に共通の原理的な態度であると思われるが、ラッセルの實用主義の認識論特にその眞理概念に対する批判は、先づ第一に、實用主義の原理的態度そのものに向けられていふことが出来よう。

元來、實用主義は意味に關する新しい理説であると共に、又眞理に關する新しい定義でもある。従來の眞理概念に於いては、認識の眞理性は上述の如く観念と實在との一致 (agreeing) にそれが求められて来たのに対し、實用主義の眞理概念では観念の導く (lead) その層階の有用性 (usefulness) に、眞理

判定の規準が求められている。勿論、彼等实用主義者と雖も、観念と実在との一致を真理の判定規準として承認しないと言うのではない。唯彼等のいう実在と観念との一致が、必ずしも「模写」(copying)乃至は「対応」(corresponding)を意味しないというだけである。ジェームズは「模写は実在との一致の重要な仕方の一つではあるが、決して本質的なものとは言えない」と言っている。彼等にとつて、観念と実在との一致ということは、実に「誘導」(leading)ということの意味している。主知的には模写ということが真理判定規準として重要ではあつても、彼等にとつては、それは決して本質的な概念とは言ひ得ないのである、何故ならば、実際的には観念が対象に一致(模写)するというよりも、その観念が我々を何処へ導いて行くかと言うことの方が遙かに本質的で重要だからである。

彼等に従えば、元來「検証」(verification)とは「観念が自分自身を自ら立証する過程」(the process of its verifying itself)を意味している。従つて、観念と実在との一致ということは、單なる「模写」や「対応」であるよりは、寧ろ観念が自ら約束する帰結へ、我々を間違なく導いて行く能力があるか否かということである。即ち、従來の認識論上の物と観念との一致乃至は対応の問題は、实用主義の認識論に於いては、観念の「誘導」に関する問題として取扱われている。つまり、観念が自ら暗示する帰結へ、我々を「導く」ことに依つて、自らの能力を証明し得るか否かの問題として、取扱われているのである。

従つて、その意味では、総ての観念は实用主義者にとつて試めざるべきプランであり、プログラムであり、仮説たるに過ぎざるものであると言つてよい。如何に真なる観念、如何に正確なる学説と雖も、彼等にとつては單に「検証可能なるもの」(verifiability)であり、証明さるべき「仮説」たるに止まる。主知主義者の如く、一度び真なる観念として承認されたものは、無條件的(unconditional)に妥当する価値をそれ自身に持つものとは、彼等は毛頭考えていないのである。真理は無條件的な価値をそれ自身に持つものではなく、その価値は條件的(conditional)なものであり、その都度試められたる結果に見られるその能力によつて、判定さるべきものと彼等は考えているのである。

ジェームズの巧妙なる比喩を以てすれば、真理とは主知主義者の主張する如く、單数の唯一つの真理(Truth)に依つて表現されるようなものではなく、複数の多くの真理(truths)として表現されるものでなければならない。それは恰かも銀行紙幣が流通過程に於いて、必要に応じ何時でも欲望を購ひ得る現実的購買力に転じ得ると同様に、真理も亦その検証過程(verification-processes)を必要に応じ何時でも「自らを検証し得るもの」(verifiability)として、日常の生活場裏を流れて行く。真理として一度び承認されてしまえば、其処で一切が終結したのではなく、其処から將に真理が自らの「實際的価値」(practical value)を証明する検証過程が始まるのである。实用主義に於いては、一切の観念、一切の思想は所詮我々を目的へ導く道具(instrument)たるに過ぎない。しかも、総ての道具がそうであるように、その価値はそれ自身にあるのではなく、使用した結果に見られるその能力にあるのである。かく主張するのが、彼等の所謂「道具主義」(instrumentalism)乃至は实用主義の真理概念と言われるものであろう。

しかし翻つて考えて見るに、観念のもつ「實際的価値」「使用した結果に見られるその能力」とは、一体何を意味しているのであろうか。道具が欲望充足の手段であるとすれば「實際的価値」「使用した結果に見られるその能力」とは、その道具に依つて購ひ得た目的、即ち欲望の大きさに他ならないのではなからうか。实用主義のいう「有用性」とはジェームズも言う如く、我々に「真なる観念がもたらしてくれる報酬」(the payments which true ideas bring) そのものに他ならないのではなからうか。それがデューイの言う如く、仮令個人的実利的なものに非ずして、公共的福祉的なものであり、人道的倫理的なものであるにしても、兎に角实用主義のいう所の眞理性がその観念のもたらす効用如何

によつて、判定される性質のものであることは明かである。つまり、實用主義に於いては観念とか思想とかは、我々の欲望充足の爲めの、理想達成の爲めの、手段であり道具であり、その価値は行動を媒介として得られるその帰結の効用如何に依つて——眞と偽にではなく——「満足なるもの」(satisfactory)と「不満足なるもの」(unsatisfactory)の二様に判定されるものであるということである。

かく観念が客觀的事實そのものとの關係に於いて眞と偽に判定されるのではなくして、その實際的帰結に於ける有用性如何によつて、「満足なるもの」と「不満足なるもの」との二様に判定されるということ、謂わば眞理判定の規準が全く「純粹に人間の條件のみに依存している」(depend upon purely human condition)ということ、更に換言すれば眞理たるか否かの決定権が客觀の側に認められずして、一方的に人間の側のみ認められているということ——これがラッセルと實用主義の眞理概念とが、その原理的な点に於いて最も鋭く対立している点である。ラッセルに従えば、眞理とは少くとも我々の力を以てしては制御し得ぬもの、即ち「既に起つてしまつた事實」との關聯に於いてこそ判定さるべきものである。成程、眞理が何等かの意味で人間の條件に依拠し、人間の生活の當みを外にしては考え得られないものではあるにしても、眞理が眞理としての尊嚴さを持つのは、それが客觀的な動かぬものとの關係を持つべきことである。それ故、敬虔さを以て「眞理」(Truth)の問題を語らんと欲する人は「事實」(Fact)に就いてこそ語るべきであつて、断じて實用主義者の如く観念の導く實際的帰結の有用性に就いてそれを語るべきではない。かく彼は主張せんとするのである。

(4)

ラッセルの實用主義の眞理概念に対する批判の第二は、ジェームズの所謂「檢証過程」(verification processes)、デューイの場合では「探求」(inquiry)と呼ばれている観念と實在との關係に關する理論的檢討に向けられる。「實用主義の難点は、俗に檢証と呼ばれている事實と信念との間の關係が離れ離れになつてゐることである。」彼は自著「西欧哲学史」(A History of European Philosophy)のデューイに關する篇の中で、彼の探求過程そのものに犀利な批判を加えつつかく語つてゐる。

實用主義の檢証過程とは先に見た如く、観念が自己の能力を自証する過程、即ち観念が自ら暗示する所のものと、その實際的帰結とが一致するか否かを自証する過程のことである。而して、この檢証過程に於いて實用主義の主張する所のものは、從來の認識論に於けるが如く観念と物との一致を、單純に図式的に模写及至は対応として取扱うことなく、観念が自ら「導いて行く」その帰結に依つて、その観念の眞理性を判定しようと試みることであつた。謂わば観念が目的を荷負う事物へ我々を会合しむることに成功すれば、その観念は信用すべきもの、善きもの、従つて眞なるものとなるが、我々を目的を荷負う事物へ導くことに失敗すれば、その観念は誤れるもの、悪しきもの、従つて非眞なるものとなる——このような過程なのであつた。

しかし、この過程に於いて観念が我々をして目的を荷負う事物に出会わしめるということ、即ち從來の認識論でいう所の物と観念の一致ということと、その出会つた事物が有用性を持つか否かということとは、全く別の問題に屬してゐると考えられねばならぬ。ジェームズも眞理を定義して、これを單に「自ら檢証する能力のあるもの」となし、それが果して實際にcash-valueを持つか否かは、それが檢証過程に於いて自己の能力を完全に果したその結果を見なければならぬことであるとしている。又「眞とは獨立の範疇ではあり得ない。それは善の一部に過ぎない」と彼が主張するのも同様な見解を現わしたものと見るべきであつて、實用主義が眞よりも善に、即ち「實際に役に立つ」(work in practice)ということとを、その観念が眞であると言うことよりも重んじてゐる点に、彼等の檢証過程に於ける二重性が承認されているものと見なければならぬ。二重性——即ち、観念が人間の欲求を間違なく誘導して、その任務を「遂行する」(fulfil)という契機と、今一つは俗にいう事實との照合という意味で

の「実証する」(verify)という契機の二つがそれである。

而して、言う迄もないことであるが、これ等二つの契機のうちで、彼等が優位性を認めているのは「実証する」という論理的な契機よりも「遂行する」という実際的な契機の方であつて、如何に論理的な契機に間違はなくとも、観念が自らの約束を遂行するという実際的な契機が満足されざる限り、彼等いう眞理が成立し得ないのは勿論のことである。しかし、これは明かに背理である。ラッセルは上記の「西欧哲学史」に於いて、かゝる場合の実例を、戦闘に於ける作戦計画とその実際の帰結にこれを求めて見事な批評を行つてゐるが、作戦計画そのものが戦闘の推移に照合して遺憾がなくとも、戦闘の結果が不満足なものであるとすることはあり得ることであつて、この場合戦闘の結果のみから判断して、作戦計画そのものを無価値と断定することは許されないことではなからうか。にも拘らず実際的な帰結に、観念の優位性を承認する彼等にとつては、これは聊かも背理ではないのみならず、有用なるものは必ず眞なるものであり、眞なるものは又同時に必ず有用なるものでなければならぬのである。

かく彼等の認識論は事実との照合を無視してまでも、結果の有用性を尊重せんとする極端な主張を含むものであつて、しかも有用性と眞理性の二つの契機が検証過程に於いて冥合するということは、彼等が暗々裡に予定している程確實なるものではなく、寧ろ偶然的なものであると見做されねばならぬ。即ち、ラッセルの指摘する如く、実用主義の眞理概念は検証過程に於ける二つの契機の偶然的な冥合の上に成立する背理的なものと言ふことが出来るものである。

(5)

更にラッセルの実用主義的眞理概念に対する批判の一つとして挙げらるべきは、実用主義の眞理概念が、既往の客観的眞理概念に対する懐疑論的不信の上に、自己を成立せしめてゐるという事である。これは未來への自由と可能性を讃える実用主義の自己主張とは、凡そ縁遠い批判の如く受取られるが、凡らくラッセルの指摘せんとしている所は、実用主義の実際的帰結を重んずるその原理的態度そのものが、既往の眞理概念に対する不信の上に成立するものであることを言わんとしているのであろう。ジェームズが所謂眞理を「検証可能なるもの」(verifiability)と呼ぶのも、デューイが既往の眞理概念に代うるに「保証されたる主張可能なるもの」(warranted assertability)という新しい概念を以てするもの共に、從來の客観的眞理概念に對置させた彼等の新しい眞理概念への自己主張を、その根底にひそませているものとラッセルは見てゐるようである。

然らば、彼等のいう既往の客観的眞理概念に対する自己主張とは、如何なるものなのであろうか。我々は、この際、実用主義が歴史的經驗論の必然的帰結として、生誕したものであることを思い合せらば、彼等の自己主張の何たるかを、略々理解することが出来ると思ふのである。即ち、彼等の既往の客観的眞理概念への不信とは、ヒューム的な懐疑主義的眞理への不信である。

凡らくこのようなヒューム的な懐疑主義的眞理への不信が、彼等をして眞理の相対性を主張せしめ、過去に於いて、如何に確實なるものとして検証過程を繰り返えそうとも、常に「未來の結果」(future effect)の必ず眞なることは、保証し得ないとする懐疑論的自己主張を、一方に於いて成立せしめると共に、他方に於いては認識と目的との、知識と行動との關聯性に於いて、観念の実際的帰結に優位性を承認する実用主義的眞理概念を、形成せしめるに至つたものであろう。即ち、知識はそれが如何に確實なるものであろうとも、過去の經驗の「摘要」(summaries)乃至は「記録」(records)に過ぎざるものである以上は、断じてヒューム的な懐疑主義の深淵を飛び越えることが不可能であるという歴史的經驗論への反省が、彼等を駆つて知識の仮説性を主張せしめると共に、知識の本來的意味を、未來への自由と可能性にありと強調せしめるに至つたものであろう。

しかし、かように實用主義が歴史的經驗論に付きまとう懷疑主義的眞理への不信を超越し得たその理論的勝利の反面、彼等の支拂つた代償の余りに大きかつたことも、ラッセルの指摘する如く、又事實である。我々は、それを、次の項に於いて見ようと思うのである。

(6)

實用主義の認識論的自己主張が既往の客観的眞理概念に対する不信の上に形成されたものであることは以上に見て来た通りであるが、彼等がこのヒュームの懷疑主義の深淵を一挙に克服せんとして、彼等の觀念や概念の意味を未來への行動の自由と可能性に求めた時、当然の事ながら、彼等は自己の眞理概念から既往の客観的眞理概念の保持していた総ての最も大切な特質を失わねばならなかつた。

それは先づ第一に、既往の客観的眞理概念が保持していたあの「揺がぬもの」「確實なるもの」としての「尊嚴さ」を自己の眞理概念から喪失せしめねばならなかつたことである。實用主義に於いては、眞理は單に「検証可能なるもの」であり「保証されたる主張可能なるもの」たるに過ぎぬ。我々が眞理を仰いで、それに「尊嚴さ」を感じるのは、それが「揺がぬもの」「確實なるもの」としての堅固さを持つからであつて、單なる仮説として、行動の方便として、眞理を捉える實用主義的眞理概念には、最早既往の眞理概念に見られた如きあの尊嚴さは感ずべくもないのである。

成程、眞理は相對的なものであり、人間的な他の総ての事柄と同じ様に、不安定な、不確實なものであろう。しかし、それは「より確實なもの」へ「より揺がぬもの」へ自己を接近せしめて行く過程の別名たるに他ならぬものである。眞理が「尊嚴さ」を持つということは、それが「客観性」を持つということであり、眞理が「尊嚴さ」を喪失したということは、それが「客観性」を喪失してしまつたということである。従つて、實用主義の眞理概念がこの「揺がぬもの」「確實なるもの」としての「尊嚴さ」から訣別した時、彼等は同時にそれ迄既往の客観的眞理概念をして尊嚴たらしめていた、あの客観的な「事實」というものの裏付けからも自己を絶縁せしめねばならなかつたのは當然である。それは未來への自由と可能性を購わんが爲めに、彼等が支拂つた余りにも大きな代償とも言われるべきものであると同時に、又「如何に確實なるものとして、過去の検証過程を繰返そうとも、常に未來の結果に於いても亦同様に確實なるものとして、検証過程を繰返し得るとは誰も保証し得ないではないか」という彼等の認識論的自己主張を貫徹せんがために、既往の眞理概念が支拂わされた余りにも大きな犠牲とも言われるべきものである。

ラッセルが、繰返し繰返し指摘している實用主義的眞理概念の持つ最も脆弱なる盲点とは、彼等の眞理概念が「揺がぬもの」としての客観的なこの「事實」というものの裏付けを持っていないと言う点である。ラッセルにとつて「事實」とは「既に起つてしまつたこと」であり、それは「人間の力を以つてしては制御し得ぬ」客観性を持つた或るものである。このような人間の力を以てしては制御し得ぬ客観性に裏付けられてこそ、眞理は眞理となるのであつて、眞理は實用主義者の主張する如く、人間に自由と可能を約束するものである所が、ラッセルに従えば、それは人間の力を制限するものであり、又拘束するものである。それは人間の自由と可能性のマクシマムな指標であり、人間の自由と可能性が飛び越えてはならぬ限界でもある。

従つて、實用主義が人間の自由と可能性を讃え、無限の進化の道程を歩み得ると誇示し得るのも、実は人間の自由と可能性のマクシマムな指標としての事實に裏付けられた客観的眞理を彼等が拒否するからであり、人間の自由と可能性が飛び越えてはならぬ限界を指示する客観的な眞理を彼等が持つていないからである。彼等の言うが如き自由、彼等の主張するが如き可能性は、従つてラッセルをして言わしむれば、自由に非ずして無秩序であり、可能性に非ずして錯乱である。凡そ事實とは人間に「小細工することを許さぬ」客観性を持つた或るものであり、人間的恣意に対して「頑固な抵抗を示

す」堅固さを持つた或るものでもある。ラッセルが、實用主義は人間の力(human power)の無限の自由と無限の可能性を謳歌する反面、頑固な「事実」と言うものを、自己の哲学に導入することを好まない、批評しているのも、凡らく實用主義的真理概念の約束する自由と可能性が、この「事実」の抵抗の欠如によつてのみ求め得られたものであることを、指摘したものであろうと思われるのである。

(7)

以上の如く、實用主義の真理概念が誇示する自由と可能性は、既往の真理概念から「事実」を抹消し去ることによつて購ひ得たものであつた。しかし、問題は特に「事実」の抵抗なき自由とは、抑々何を意味するかと言うことであり、人間的恣意にゆだねられた可能性とは、一体何を意味するかと言うことであろう。それは言う迄もなく、手放しの自由であり、野放図な可能性たるに他ならないであろう。しかも、彼等はこの手放しの自由、野放図の可能性を以て、何を爲さんとするのであろうか。

人間の歴史を人間と環境との相互調整の過程として捉える彼等にとつて、宇宙は幸にも未だ完成されざるものである。ジュームズのいう「未だ形成されつつある宇宙」(a universe which is still in the making)であり、デューイのいう「進化の未だ完結せざる宇宙」(a universe whose evolution is not finished)である。この未だ完成されざる宇宙は、彼等にとつて無限の自由と無限の可能性とを人間に約束するものでなければならぬ。この可塑的(plastic)な宇宙をして其処に何を在らしめるかは、一つに人間の自由と可能性にかゝる問題である。彼等が既往の真理概念に、過大な犠牲を強いて迄購ひ得た自由と可能性は、今こそこの可塑的な宇宙に、何を在らしめるかの爲めに使用されねばならぬであろう。ラッセルの如く、客観的真理概念の立場を固守するものこそ、却つて宇宙を完成されたもの、完結したるものとして把えるものであり、この可塑的な宇宙の約束する無限の自由と無限の可能性を、窒息せしめるものと言われねばならぬであろう。かくして、彼等は手放しの自由と野放図の可能性とを以て、無限の進化の道程を歩もうとする。

しかし、これはラッセルをして言わしむれば「神」をも怖れぬ人間の傲慢であるのみならず、真理の尊厳を蹂躪する許し難き「宇宙的背信」(cosmic impiety)とも言われるべきものである。宏大無辺の宇宙に、人間の自由と可能性が滲透し得る部分は、極く微少なる部分たるに過ぎない。しかも、この極めて微少なる部分に於いてさえ、人間の自由と可能性は真理に服従することに依つて、漸く到達し得られるものである。古代ギリシヤに於いても、中世に於いても、人間の自然に対する態度は柔順であり敬虔であつた。彼等は宇宙に対する人間の傲慢とも思われることに対しては、慎重にこれを差控えていた。然るに、ルネサンスに於いて、人間の權威が回復されて以來、事情は一変した。人力への不当な過信が始つたのである。しかも、現代に至つて、この病弊はその頂点に達している。手放しの自由と野放図の可能性とを以て、無限の進化の道程を歩まんとする實用主義こそ、かゝる病弊を代表する哲學的傾向の現代的表現とも言われるべきものである。

現代「神」は退位せしめられたと言われるが、その「神」の座に「神」に代つて坐つたものは、他ならぬ人間であつた。人力の万能(omnipotence)に酔ひ痴れた「宇宙的背信」を敢えて怖れぬ人々であつた。實用主義こそ、將にかゝる現代の最も著しい傾向である人力万能の、盲目的信仰の上に始めて成立つものであり、遑くフィヒテ、ニッチェーに連らなる「力の哲学」(power philosophy)の一種とも呼称されるべきものである。

真理を環境改造の道具として、如何に彼等が未來の改造の可能性と自由を夢見ようとも、所詮彼等の自由は創造への自由と非ずして、無統制と混乱への自由であり、彼等の可能性は進化への可能性と非ずして、狂気と錯乱へ向かう可能性たるに過ぎないであろう。實用主義者が、未來を改造する自由と可能性が人間の力に依存する以上、何が真理と呼ばれ、何が事実たらしめられるかも、亦人間の力に依存せ

ねばならぬと主張する時、これに対してラッセルは、若し過去というものが我々の現在の行動によつて影響を受けぬものであるならば、既に起つてしまつた事実に基づく眞理とは、凡そ實用主義者の主張とは反対に、現在及び將來の人間の意欲 (volition) とは無関係のものでなければならぬと靜かに答えるのである。こゝに於いて實用主義者の眞理概念に関する見解とラッセルそれとは、二つの双曲線の如く相隔つていくのを我々は感ずるのである。 (1951. 12. 15)

参 考 文 献

- RUSSELL, P. : Human Knowledge, its scope and limits, London, 1948.
A History of European Philosophy, New York, 1945.
Sceptical Essays, London, 1929.
JAMES, W. : Pragmatism, New York, 1907.
Meaning of Truth, New York, 1909.
DEWEY, J. : Development of American Pragmatism, Twentieth Century Philosophy, edited by DAUGBERT D. Runes, Philosophical Library, New York, 1947.